研究ノート

メキシコ・オアハカ州の社会運動と人々の「学び」に関する試論

—青年・女性・農民それぞれの動機と取り組みから—

北　野　　収*

要　約

南部メキシコでは様々な分野に関わる社会運動が活発化している。その源泉には，グローバル化やネオリベラリズムといった外的環境だけでなく，若者，女性，農民といった普通の人々の「学び」への欲求とそれを基にした実践がある。本稿では，オアハカ州テワンテペック地峡地域の草の根レベルで，環境，人権，映像製作の領域で社会運動に関わる3人のオアハカ人へのインタビューに基づき，彼・彼女らの「学び」への動機や実践について紹介する。知識人の主導という従来の社会運動観以外に，普通の人々の日常の実践から生まれる問題意識こそが社会運動の源泉であり，内発的発展の種子は彼らの学びへの欲求の中にみいだせるのではないかという仮説を得た。

1．問題の所在

1980年代の構造調整プログラム，1990年代の北米自由貿易協定（NAFTA）への参加など，過去20年以上に渡って，徹底したネオリベラリズム路線を歩んできたメキシコの経済と国家に対して，先住民族や市民社会は様々な形で反応してきた。チアパス州のサパティスタ民族解放軍（EZLN）の蜂起とその後の動向はその最も先鋭的なものであるが，それ以外に，地域づくりや環境活動といった実践

* 日本大学生物資源科学部准教授（コミュティビジネス論講師）
College of Bioresource Sciences, Nihon University

にも「対抗運動」としての意味を見出すこともできる（北野　2003a, 2003b, 2003c, 2004）。

筆者はメキシコの最貧困州の１つであるオアハカ州をフィールドに，1990年代以降活発化するローカルNGO発生のメカニズム（設立の背景，活動の実態など）に関する実証研究と平行して，社会運動を組織する知識人へのインタビュー調査により，彼らの個人史としてのライフヒストリーの収集も行なってきた。これらから得られた中間的な成果として，当該地域の地政学的文脈に規定されながら，政治・経済・社会的環境の変化というマクロ要因が契機となり，知識人個人に含まれる「資源」（洞察力，問題意識，ネットワーク，専門的知見など）が，具体的な行動なり，実践へと発展するという「対抗運動」発現のメカニズムの一端を確認できた。しかし，マクロ的動向と知識人のみによって，社会変革への取り組みが実現することはあり得ない。

実践の主体は，本来，農民，女性，若者といった学歴もなければ，財産もない普通の人々である。彼らは，なぜ社会運動に，あるいは，地域づくりに関わるようになったのだろうか。いうまでもなく，内発的発展は運動であり，そこには「学び」「学習」が欠かせない。普通の人々の遍歴なり，問題意識を吟味することにより，彼らの「学び」への動機の一端が理解できるとすれば，社会変革のメカニズムを，より立体的に把握することが可能となるはずである。本稿は，筆者がこれまでインタビューした「実践者」の中から，３人の話を検討することにより，社会変革の源泉はどこにあるかという命題に接近しようとするものである。

2.「教育」と「学び」に関する２つのテーゼ

２つのテーゼを紹介したい。住民参加型開発論における一般的なテーゼに「手段」としての参加と「目的」としての参加というものがある。対外的に「住民参

加型でやっている」という名目に終始すれば，それは手段である。一方，参加を通じた動機付け・意識化が主体形成に作用するとすれば，それは目的である。また，「国家」と「くに」を混同あるいはダブらせて語ること，人種や民族や国籍のいずれに基づくのかを意識せずに「○○人である」と語ること，こうした言葉の使い方の曖昧さが事柄の本質の理解に対するバイアスとして作用するという別のテーゼも想定できる。

以上のことを念頭におけば，我々が頻繁に語る教育という言葉には，社会における制度・システムとしてのそれと，教育を受ける者自身の「学習」という概念が含まれている。本稿では，便宜的に，前者を「教育」，後者を「学び」として文字上で区別したい。括弧なしの教育には，社会や経済に役に立つ奉仕できる人材を供給するという目的と学習者個々人の教養・スキルの向上を通じたエンパワーメントという目的が存在し，現実には教育の現場においても，学習者個人レベルにおいても，両者が二律背反的に並存するというジレンマ状態も想定できる。例えば，学びを目的として設定すれば，教育は手段となってしまう可能性がある。逆に，フレイレの言葉でいうところの「銀行型教育」（Freire 1970（小沢ほか訳 1979））や受験における偏差値競争に勝つことを「教育」の目的として設定すれば，「学び」は知識の記憶（暗記）のための手段となる。勿論，教育の場には公教育（学校）や予備校もあれば，地域における実践としての社会教育という場もあり，それぞれ異なる使命を有していることは容易に想像できる。鈴木（1997：40-41）は，学習と教育を区別する必要性を前提として，学校による定型教育（formal education）が教育主体と学習主体が分離されているのに対し，日常の生活実践における非定型教育は両者（informal education）が未分離，途上国の教育開発のなかかで育まれた不定型教育（non-formal education）は両者の分離と協同が前提となるとしている。

パウロ・フレイレとイヴァン・イリイチというラテンアメリカを代表する2人の知の

巨人は，上記のテーゼに関連して，それぞれ独自の提言と実践を提唱し，主として第三世界の「教育」と「学び」に関する有力な言説が形成された。フレイレは『被抑圧者の教育学』のなかで，「銀行型教育」と「課題提起型教育」という2つの理念型を提示し，抑圧された貧困者に必要なのは後者の教育方法であるとし，今日のエンパワーメント言説の基礎を提供した。イリイチは『脱学校の社会』のなかで，「脱学校化」というラディカルな選択肢を示し，学校に独占された「教育」から決別し，地域における生活のなかでの「学び」に希望を見いたした（Illich 1970; Illich, *et al.* 1973）。一見，類似のテーゼを主張しているかのようにみえる両者は，「教育」をめぐって激しい論争を展開した（イリイチほか　1980）。

これらを念頭に置きつつ，反グローバリズム/オルタナティブな発展（開発のオルタナティブ）を追求する社会運動の草の根で活動する人々の事例を紹介し，後段での社会運動の文脈における「学び」についての考察に供する。

3．非・不定形の「学び」の展開～先住民系「農民・女性・若者」へのインタビューから

(1) 非定型の「学び」の実践の場としての地球大学

オアハカ市にある地球大学（Universidad de la Tierra）は，正規の大学ではなく，メキシコの先住民族や貧困層の若者の「学び」の場として設立された大学レベルのフリースクールのような機関である（図1，写真1）。自ら，脱プロ知識人，草の根活動家と称し，『学校のない社会への招待』（Prakash and Esteva 1998）の著者としても知られるグスタボ・エステバ[1]と以下にみるダミアン青年

1　エステバの思想については北野（2003a）を参照のこと。エステバは，長年のイヴァン・イリイチとの対話・交流を通じて，「制度」としての教育ではない「学び」の場を創る構想を暖めていた。イリイチとエステバの対話については，稿を改めて紹介したい。

図1　地球大学のロゴ

写真1　地球大学の内部
（2002年8月30日，筆者撮影）

を含むサポテコ人の青年グループとの出会いを契機として，しばらくの準備期間を経て，2001年に誕生した。エステバは，イヴァン・イリイチらとの交流を通じて，彼らの産業社会批判，コンヴィヴィアル（共愉・共生）思想をメキシコの文脈で継承し，実践に取り組む左派知識人である（北野　2003a）。

イリイチと同様，エステバらは「教育」という言葉を使うこと，言葉の意味そのものを否定する。地球大学は教授もいない，カリキュラムもない「大学」である。就学期間は半年～2年半で，随時入学可能である。地域への貢献を念頭において，各学生がプロジェクト（課題）を設定し，それを通じて必要な技術や知識を習得する。例えば，民族や村（コミュニティ）の土地紛争を解決するために土地に関する法律を学ぶ，地域の伝統文化の再評価と住民教育のためにドキュメンタリー映像作品の製作技術を学ぶなど，学生各自の興味とニーズに合致させた形で，チューターの指導の下，教室におけるゼミやコミュニティにおける自分のテーマに取り組む。コアとなる学習法は，①教室におけるレクチャーサークルという学習法（ファシリテーターの下で行なわれる輪読会と議論），②「実践を通じた学び（aprender haciendo）」，③「実践における省察（reflexción en la acción）」（日々の実践と哲学との関連を考えること），④「サービスとしての知識

(aprender para servis)」(学習した知識や技術を社会に還元すること）である。ただし一切の必修は存在しない。外部からの専門家（無料ボランティア）を招聘したり，学生のフィールド研究をサポートする。就学期間は約2年程度（6～30か月）である。学費は期間にもよるが平均1人5万ペソ（5万円強）で，卒業後年収の10%程度返済によるローン制度がある。ただし，施設維持や運営に関し，外部ドナーの助成に依存している状況であり，経営的には楽ではない。在籍学生は，数人から25人程度までとその都度変化している。スタッフおよび事務所は後出のCEDIと共通である。

筆者が現地でインタビューした卒業生には，法律を学んだテペヤック人権センター[2]の女性スタッフ，シエラフアレス地域でオルタナティヴメディアとしてのコミュニティラジオ局[3]の立ち上げに関わった男子学生などが含まれ，卒業生は州内各地での草の根活動に「専門性」を発揮している。前者は，先住民族の村出身の女性であり，後者は卒論のために当該地域を訪れ，その後，メディアを活用した地域づくりに関わりながら地球大学に出入りするようになった。地球大学での学びに至るまでの道のりは，人それぞれだが，1つの例として，次節，エステバとともに地球大学の設立に関わり，その後，卒業生となった若者の遍歴を紹介する。

(2) サポテコ人青年活動家の遍歴と「地球大学」への道のり

ダミアンはオアハカ州のイクステペック市に住み，サポテコ人の血を引く25歳(2004年9月1日インタビュー時点）の青年である。決して裕福なミドルクラスの家庭ではない，ごくありふれた労働者の家庭の息子である。父親はイクステペッ

2　先住民族コミュニティの代表が参加した教会関係の集会での先住民族の人権擁護を団体の設立に関する提案を受けて，1992年に神父によって設立されたNGO。1997年に市民団体としての法人格を取得。事務所はフチタン市近郊のイクスタルテペック。法的権利についてのコンサルティング，裁判時の支援（通訳等），権利概念に関する普及啓蒙も行う。先住民族の権利だけでなく，女性や子供の権利も扱う。

3　活動の概要については，北野（2003b）を参照せよ。

クの出身で，母親はナヤリ州の出身であった。父親は，電気会社の労働者，警察関係の仕事などいろいろな仕事を渡り歩き，最後は自分で商売をしていた。父母とも政治的活動には一切関与していなかった。母親は家事をしていたが，後にコカコーラの工場で働いた。ダミアン自身は父の出身地イクステペックで生まれた。事情により，11歳の時，母親と一緒に暮らすためナヤリ州の州都テピックに移転した。イクステペックとは異なり沢山の産業があるところで，土地に慣れるのは大変だったという。いつも成績優秀な生徒でトップグレードだった。課外活動も含めて，学内ではうまくやっていた。しかし，彼はいつも父と自分の故郷であるイクステペック戻りたいと思っていた。トピカに母親と4年間住んだ後，父親が死去した。その翌年，15歳の時に，祖父母と一緒に住むためイクステペックに戻ってきた。

ダミアンは，なぜ社会運動に関わるようになったのかについての明示的な理由は語らなかったが，母親がアメリカの企業であるコカコーラで働いていたことが根底にあるという。それが，オアハカに戻ったら近代的な生活を送るナジャリの友人たちとは違うことをしたいという動機の1つかもしれないと語る。社会運動に関しての初めての経験は，ナジャリ州で親しい友人とともに教会での読書サークルのようなものに参加したことだと語るダミアンにとって，若者による社会運動が活発なイクステペックで運動と関わることは自然な成り行きであったと考えられる。1994年に15歳でイクステペックに戻ってきたとき，「イクステペックの文化を守る」と称するある文化グループのフォーラムに参加した。それは，名称のような「守る」ためのものではなく，より積極的にイクステペックの文化を「耕す」ことを意図していた（ダミアン）。後にローカルNGOでの同僚となるルーベンの姉が参加していた。美術や先住民言語などワークショップを通じ促進していたそのグループはその後解散した。ダミアンとルーベンはその後，「イクステペックの連帯」という左派グループで雑誌づくりをした。1996年のことである。

そのグループには，当時17歳のルーベンを含み，下は6～7歳の子供から27歳の青年までのメンバーがいた。しかし，このグループは左派政党の民主革命党（PRD）に非常に関わりが深く，ダミアンのように政党とは繋がりのない人間は違和感を感じていた。一方，ルーベンはPRDと繋がっていた。ダミアンとルーベンたちは話し合いの結果，政党とは関わりを断ち，市民団体を作った。これが，現在ダミアンらが運営するローカルNGO，Bibaani（代替テクノロジー推進センター）の前身である[4]。Bibaaniは，美術や有機農業に関するワークショップ，雑誌の発行を行い，ローカル文化の再評価と啓蒙活動を続けてきた。

1998年，Bibaaniは，MILPAという団体の主催により開催された青年NGOの集まりで，ゲストスピーカーとして招待されていたエステバと初めて出会う。そこでは，講義，話し合い，フォーラムが持たれた。ダミアン達は，オアハカ州の海岸部から山岳部に至るまで，自分たちと類似の団体が存在することを知ったという。脱職業知識人として草の根運動の「強力なプロモーター」（ダミアン）として頭角を現すグスタボ・エステバは，CEDI（異文化出会い対話センター）の代表であった。その会議での教育と健康に関するエステバのスピーチを機に，ダミアンらとエステバの繋がりが始まり，やがて彼への「憧れ」とともにエステバの下で働き始め，地球大学のプロモーションに関わる。1999年に，Bibaaniがオアハカ州内の青年組織，教員組織15団体が集まった会合を主催し，再び，エステバをゲストスピーカーとして呼んだ。

ダミアンによれば，当時，Bibaaniに参加した若者の間には，3つのイデオロギーがあった。1つはマルクス主義を政党政治という形でのフォーマット化，すなわち左派政党の一部としての活動を希望する者，2つは政党との関わりを完全に拒否し，制度的にいわゆる「NGO」に徹するべしとする者，3つはアナーキ

4　Bibaaniの活動については，北野（2004）を参照せよ。

スト的イデオロギーを重視し，政党でもいわゆる「NGO」でもない活動のあり方を追求しようというダミアンであった。ダミアン自身は，オアハカ出身のアナーキストでメキシコ革命の先駆者であるリカルド・フローレス＝マゴン（1874-1922）[5] の思想にも影響を受けた。グスタボのアイデアと交わることにより，Bibaani は内部の3つのイデオロギー間のコンフリクトを経験し，リフレクションをすることができた。それまでに実施してきた活動に自信を持ち，より強固な合意と結束が実現され，結果としてダミアン達は，NGO という制度は取り入れつつ，3番目の路線を採ることになる。政党による「政治的闘争」から，開発に対するオルタナティヴという「実践主義」とそのための「学び」へと軌道修正したのである。それは，「革命」ではなく「開発に対するオルタナティヴ」を追及する EZLN のアドバイザーの1人であるエステバの影響が大であった。

1999年にダミアンは高校を退学したが，2001年に，地球大学の「学生」となった。地球大学の第1期生としての学びについて，3つのことで苦労したと語る。1つは，「伝統的な勉強」とのギャップであった。2つは，インフラの不足であった（開校当時，コンピューターは2台しかなかった）。3つは，外部の人々に勉強の内容なり目的を説明することの困難であった。「政府が公認せず，教師もいない「学校」で何が学べるのか」と周囲からの失笑を買ったという。その後，ユネスコの訪問を受けたり，米国のケロッグ財団の助成を受け，一定の認知がなされた時，失笑は受容に変わった。こうしたなか，1年目は，ラジオ番組，ビデオ作品，雑誌など，メディア製作の技術を学んだ。商業メディア政策のためではなく，地域の文化を記録し，人々の再評価に供するための技術である。彼が製作し

5　1910年のメキシコ革命勃発に先駆け，1890年代から反政府運動に関わり，1905年にメキシコ自由党を結成。独裁者ディアス打倒を目標として掲げる。国内での弾圧により米国に移り，武装蜂起や執筆を通じて革命を指揮したが，数次にわたる逮捕・投獄の末，病死した。ヨーロッパのアナーキスト思想の影響を受けつつ，メキシコの文脈で行動に移そうとした指導者である（国本　2004）。

たビデオ作品（『孤独な道（Ruta Soledad)』）は2003年に賞を受賞し，フランスで行なわれたフェスティバルにも出展された。オアハカ市に移住してきたアウトサイダーとしての先住民の疎外を扱った作品である。

ダミアンは，地域では一目おかれる存在となった。賞を獲ると周囲は「ビデオ映像作家」というラベルを貼りたがるが，ダミアンはそれをよしとしない。今日，チマラパスやテワンテペック地峡の各地でのコミュニティラジオや印刷メディアに関する活動の支援に関わるほか，修了後も地球大学にも頻繁に出入りをし，指導者として，後輩たちとの「学び」を楽しんでいる（Esteva 2004)。フリーランスの映像作家として自活しているダミアンだが，映像・ラジオ・雑誌という活動領域の中で，彼はいかなる領域においてもスペシャリストとして見られることを好まない。周囲から「いつチアパスに行くんだい？」「お前もサパティスタみたいになるんだろ？」とからかわれてきた青年は，本人自身も予期しない形での「闘争」を担うこととなった。

(3) ソケ人女性の経験にみる「学び」のきっかけと動機

チマラパス熱帯林のなかにあるサンミゲル・チマラパス自治体のラスコンチャス村（コミュニティ，世帯数約400戸）にはソケ民族が居住している。

ソケ人のヴィルギータはインタビュー当時24歳の既婚女性である。兄弟姉妹は12人いるが，彼女の子供は１人である。彼女の母親は定められた相手と結婚したが，ヴィルギータは恋愛の相手と結婚した。筆者が彼女と面会したのは，彼女が地球大学（後出）への入学を希望しており，地球大学スタッフが，筆者への現地案内を兼ねてラスコンチャス村に出向き，ソケ人のグループを対象に開催した地球大学の説明会の場であった（写真２)。

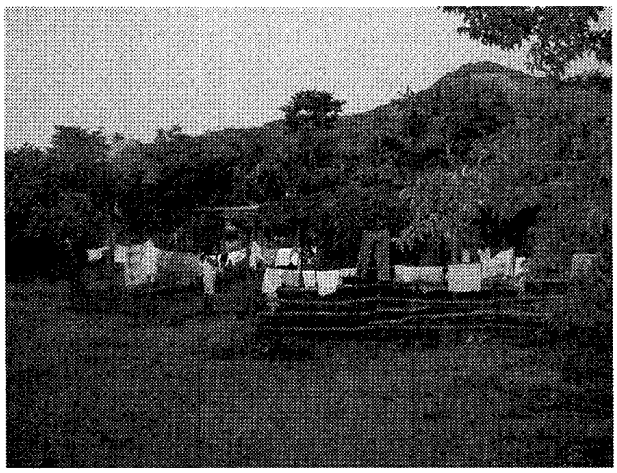
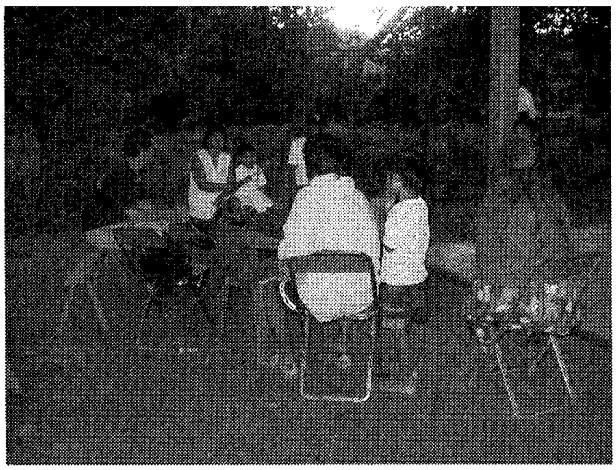

写真2　ラスコンチャス村と説明会の様子
（2002年9月12日，筆者撮影，右写真左から2人目がヴィルギータ）

1990年代から，村にはいくつもNGOが出入りしており，彼女は村から選ばれてあるNGOのワークショップに派遣され，その後，村内で女性の組織化（グローサリー店の運営）と環境活動に関わるようになった。ソケ・デルトゥレ協同組織（Oraganizatión Coperativa Zoque Deltule）と名乗るグループが始まったのは1998年である。グループのメンバーは21人で，うち11人が女性である。しかし，当初，村内の男性からの偏見が強かったという。「時間の無駄だ」「気でも狂ったのか」と中傷され，ワークショップのために都市部に行っては村に戻ることを繰り返していたため，「町で売春をしているのではないか」という疑いの目でみられたことすらあった。ただ，夫は彼女を拘束することはしなかった。

「いくつかのNGOからコンタクトがありました。ワークショップに参加したのは最初は女性だけでしたが，本を輪読をしたり，他所の村の取り組みに関するビデオを見ました。それから，女性の組織をつくることにしたのです。（中略）ビデオを観て，他所では組織を作り生産的なプロジェクトができるのに，どうしてこの村ではそれができなかったのだろうかということに気付きました。私たちは活動に着手して，時々，上手くいかないことに失望しながらも，続けようとしたのです。ある神父様が村に来た時，私たちはNGOと活動を始めこと，自分た

ちの夫たちは収入を稼ぐ機会がないこと，子供たちは学校にやっても鉛筆や文具すら買えないこと，だから，養鶏や豚飼育などの何らかの生産的プロジェクトが必要なことを訴えました。これが私たちの取り組みの始まりでした。（中略）その神父様が（大きな支援団体のネットワークと）コンタクトをとってくれたのです。」（ヴィルギータ）

その後，他の政府系機関の働きかけにより，女性グループによる環境保護への取り組みが始まった。当初は焼畑の適正運用に関する指導であったが，現在，グループは自発的に森林に住む希少種の野鳥（オウムの一種）の保護・繁殖活動を展開している。

「私の夢は，村全体が一緒に活動すること，もしくは，少なくともっと沢山のグループが参加してくれることです。私たちは，グループを法人化したいと願っています。そうしないと，プロジェクトに助成を受けることができないからです。1週間ずっとグロサリー店で働いても，収入はグループに行き，個人の所得に還元する余裕はまだありません。（村の）誰も，野鳥保護のための財政負担などしたいとは思わないでしょう。参加する人が限られているのは，こうした理由によるのです。もし，外部からの助成が受けられれば，もっと多くの人が参加してくれるはずです。」（ヴィルギータ）

所得向上，環境保護以外に，グループが，そしてヴィルギータが心を痛めるのはソケ文化およびそれに対する誇りの喪失である。テレビ，ラジオ，スペイン語による学校教育の普及により，子供たちの世代はソケ語を話さない。民族衣装も着ない。学校でソケ語を話すと先生に叱られるという。1980年代，彼女がまだ子供の頃，母親は彼女を連れて，町に魚やその他の生産物を売ったり，買い物をしたが，母親は町でもソケ語で通していたという。ある日，ヴィルギータ一人で町に行商に行くことになり，そこで彼女は母親がしたのと同様，ソケ語を用いた。「このインディアンは何語をしゃべっているんだい？」「この貧しい人々が話して

いる言語は何語か？」と人々から大いに嘲笑され，侮辱されたと感じた。それ以来，ソケ語を話すことを恥じるようになったという。このトラウマを克服し，ソケ語の重要性に誇りを感じるまでに十数年を要したという。経済・環境・文化という一見異なった問題領域は，彼女の中では1つのものとして結びついている。それが，地球大学への関心という，さらなる向上心へと繋がったのだと筆者は考える。

彼女がその後，地球大学に入学したという話はスタッフから聞いていない。子供や夫と離れ，遠く離れたオアハカ市（片道8時間以上）に長期滞在することは極めて困難な選択だと思われる。ソケ人グループからの聞き取りおよび一人の女性リーダーの断片的な語りに基づいた情報ではあるが，たとえNGOや政府機関による外来者よるワークショップという非定型の学びであっても，そこでの経験と学びから，次の学びへの欲求（地球大学という不定型の学び）が生まれると理解したい。

(4) サポテコ人農民有志による「文明の復活」という名の環境啓蒙

フチタン市の近郊イクスタルテペック市にある環境改善指導センター（Centro de Orientación Para el Mejoramiento del Ambiente, COMA）は，1994年に始まったサポテコ人系農民による任意団体である。一人の医師が不衛生な環境により下痢が多発している状況を分析し，主としてゴミ処理の観点から都市および農村の生活環境を見直すための働きかけを行なっている。現在は，医師は運営から手をひき，賛同した農民ら6名によってボランティア・ベースの活動が継承されている。6人は「普通の農民」であり，中には文字の読み書きができない者もいる。外部からの財政的支援はなく，堆肥や種子の販売により活動の財源を賄っている。

都市部における活動の対象は「学校」である。イクスタルテペック市内にある

小学校の1つに隣接して，COMAの施設がある。施設には，屋外集会場（屋根付），堆肥製造施設，乾燥トイレ，地元産の材料で立てられたエコ建築などが展示されている（写真3）。COMAの活動は学校を対象にした啓蒙活動である。既に，市内の10の小中学校に対して働きかけ，ボトルに入ったソフトドリンクやポテトチップのような産業化された食品を出すのを止め，自分たちが作った天然のジュースや地元食材による食事に改めさせた。また，小学校に隣接した立地を選んだのは，学校に出入りする児童・父母に対するデモンストレーション効果である。第1に，児童・父母が直接，立ち止まり，環境に配慮した生活に興味をもって貰うことがある。第2は，集会施設で様々なワークショップや話し合いが行なわれるため，その光景を児童・父母が眼にすることによる副次的デモンストレーション効果を狙っている。メンバーの農民は6か月毎に会合を持ち，活動の点検を行なっている。

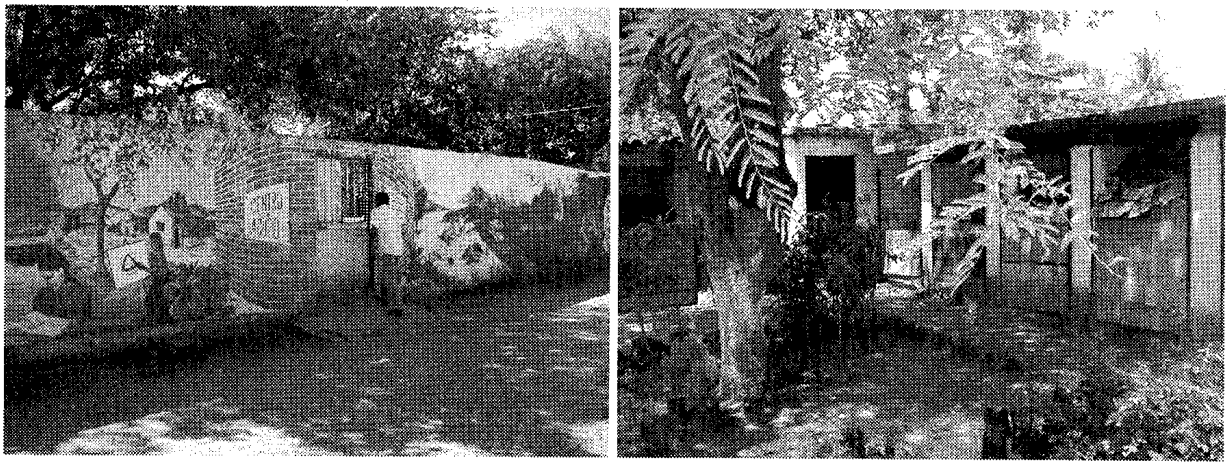

写真3　学校に隣接したCOMAの外観（壁画による啓蒙）と内部施設
（2003年9月4日，筆者撮影）

農村部における活動はワークショップである。相手側からの要請ベースで実施されており，堆肥作りと販売，ゴミの分別方法，乾燥トイレの使用法など，技術的な内容に関するものが多い。COMAの施設で行われることもあれば，現地に出向くこともある。ワークショップは長いもので5～6か月継続されることもあ

る。テワンテペック地峡地域の約150コミュニティがCOMAの活動に関わっている。COMAの活動が広がった理由は，元々こうしたことに対する潜在的ニーズがあるということ以外に2つあると考えている。1つは，ワークショップが無料だということである。2つは，ワークショップに地元のジャーナリストを呼ぶことである。この2点に，コミュニティをこえて「口から口へと伝わる」（サンチアゴ氏）ことが加わるのである。

メンバー農民の1人であるサンチアゴ氏は，「文明の復活」（El Retorno de la Civilización）と表現する。自分たちの身の回りにある物全ては祖先から文化的な相続物であり，例えば，「川は我々の文化の血液の流れ」と考えられる。その血液の川に人々はゴミを投げ込み汚していることになる。「文明の復活」とは，自分たちの文化的ルーツを再認識し，同時に環境意識を高めることだと考えている。

4. 考　　察

以上，断片的な情報ではあるが，オアハカ州テワンテペック地峡地域での社会運動としての内発的発展に関わる学生，女性，農民のそれぞれの学びの実践または動機について，紹介した。これを踏まえ，社会運動とイン（ノン）フォーマルな学びとの関係について，議論を深めたい。

第1に，学びの動機に関するインプリケーションである。本稿では，手段として教育という制度（枠組み）があり，そこで学びが実現されるのか，枠組みかかわらず，学びが達成されれば，それを教育と呼ぶべきなのか，という二項対立的な議論に結論を出すことはしない。この命題を，上述の社会運動としての内発的地域づくりや環境活動に援用した場合，実用的な知識・技術が先なのか，アイデンティティの再認識を伴った脱開発的な価値観への転換が先なのか，という問い

になるだろうが，少なくとも，上記の事例を見る限りでは，学びの動機は様々であることが分かる。

ダミアンは，元々政治運動寄りの活動をしていた。本人はそのことに必ずしも満足していた訳ではないが，PRD とのつながりが深い周囲の友人の影響もあり，有機農業や美術ワークショップの活動と並行して，情報誌の発行を行なっていた。この時のダミアン自身の学びは不定形のそれであった。結果として，知識人エステバとの出会いが，政治との決別と実践技術の習得という学び（非定型的[6]）へと導かれた。その後，再び，自ら地域に戻り，ローカル NGO のメンバーとして，現在はワークショップなどの不定形な学びの提供に関わるのである。ソケ人女性のヴィルギータの場合は逆である。元々，NGO 等の外部からの開発アクターの働きかけにより，女性リーダーとしての資質を涵養された後に，実用的な学びへの動機付けがなされたものと考えられる。彼女へのインタビューに「実用性が先か，価値観の転換が先か」という問いに対する明示的な答えは見られないが，少なくとも，ダミアンの場合（政治思想を含む「価値観」→目的意識を伴った「実用性」の追求）とは違う動機付けが存在したのではないだろうか。最後に，COMA のサンチアゴ氏らの農民は，当初は医師のイニシアチブに頼りつつも，ダミアンやヴィルギータと比べて，より自主独立的な立場で，環境教育という学びの機会を周囲に対して提供している。

第 2 に，知識人主導の社会運動というステレオタイプに関するインプリケーションである。社会運動や地域づくりにおいて知識人の果たす役割は大きく，一般に，特にラテンアメリカにおいてその傾向は顕著であるといわれる。オアハカ州を事例とした筆者のこれまでの調査においても，環境や人権など様々な分野で活動

6　地球大学は，専門家や同僚学生との批判的議論，自分の学びのプロジェクトの遂行などが包括された非定型的な学びの場であり，地域づくり一般や政治活動の現場における経験を通じた不定形的な学びとは一応，区別しておく。

するローカルNGOの多くが，政府機関や大学出身のインテリ達によって設立されていることが確認されている（北野　2003a, 2003d, 2007a, 2007b）。運動と「学び」「学習」は不可分の関係にあることから，当然，「学び」に関する動機付けや資源動員も，脱職業化した知識人の手による「外来種」なのだという見方もあるだろう。しかし，エステバらは，「生まれ変わった知識人」は旧来の「頭デッカチの左翼反対派の前衛」とは違い，「生まれ変わった新しい種類の自覚を体現している」と反論している（Prakash and Esteva 1998（中野訳　2004：196-199））。このことは，筆者もこれまでの調査において，認識を深めているところである（特に，北野　2003c, 2007a）。

上記のいわゆる普通の人々のストーリーをみる限り，彼ら自身も生活実践や外部者とのやりとりから，学びのニーズや欲求を自発的に育み，涵養し，さらに，知識人との交わりや非・不定形の学びを通じて，草の根レベルでの社会変革の担い手へと発展的に変化していく可能性を指摘できる。すなわち，普通の人々の日常の実践から生まれる問題意識こそが社会運動の源泉であり，内発的発展の種子は彼らの学びへの欲求の中にみいだせるのではないか，ということである。

5．むすびにかえて

「学び」か，「教育」かというテーゼに立ち戻れば，当然のことながら，社会運動という文脈では，「教育」ではなく「学び」という言葉にこだわりたい，というのが筆者の立場である。もちろん，前節で見出した仮説を端的に実証することは極めて難しいが，今後，当該地域における社会運動の様々な実証分析と注意深く接合・検証していくことにより，仮説としての精度を高めていくことは可能であろう。

付記

本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金（2002-2004年度・基盤研究 B）の成果の一部である。

引用文献

イリイチ，I ほか（1980）：対話—教育を超えて：I・イリイチ vs P・フレイレ，角南和宏ほか訳，野草社.

北野収（2003a）：メキシコのポスト開発思想—グスタボ・エステバの「言葉」の教えるもの—，国際開発研究，**12**(2)，pp.141-157.

北野収（2003b）：農村放送による地域活性化と内発的発展—メキシコ・オアハカ州シエラフワレス地域の事例から—，開発学研究，**14**(2)，pp.8-17.

北野収（2003c）：メキシコの教会系の社会開発運動と NGO 活動の変遷—権威と市民社会の狭間で—，開発学研究，**14**(1)，pp.34-44.

北野収（2004）：南部メキシコの内発的発展運動における農村青年 NGO—変革のエージェント・カタリストという役割—，開発学研究，**15**(2)，pp.10-20.

北野収（2007a）：メキシコの先住民族組合 UCIRI の思想と哲学—ベンダホフ神父の個人史を手がかりとして—，協同組合研究，**26**(2)，pp.34-50.

北野収（2007b）：政府と現地 NGO の関係にみる自律・依存・協働—南部メキシコにおけるローカル NGO の成立・展開過程から—，開発学研究，**18**(1)，pp.20-27.

国本伊代（2004）：メキシコ革命の思想—革命の先駆者リカルド・フローレス＝マゴン，今井圭子編，ラテンアメリカ開発の思想，日本経済評論社，pp.73-89.

鈴木敏正（1997）：学校型教育を超えて：エンパワーメントの不定型教育，北樹出版.

Esteva, G. (2004): Back from the Future, Presentation in *Schooling and Education: A Symposium with Friends of Ivan Illich* organized by TALC New Vision, Milwaukee, October 9.

Freire, P. (1970)：*Pedagogia do oprimido.*（小沢有作ほか訳（1979）：非抑圧者の教育学，亜紀書房）

Illich, I. (1970)：Deschooling Society, Harper & Row.（東洋・小澤周三訳（1977），脱学校の社会，東京創元社）

Illich, I., *et al.* (1979)：After Dschooling, What?, Harper & Row.（松崎巌訳（1979），脱学校化の可能性，東京創元社）

Prakash, M.S. and G. Esteva (1998)：*Espacping Education*, Peter Lang.（中野憲志訳（2004）：学校のない社会への招待，現代書館）